ある朝海に

西村京太郎

講談社文庫

ある朝(あさ)　海(うみ)に
西村京太郎(にしむらきょうたろう)
© Kyotaro Nishimura 1980
1980年 9 月15日第 1 刷発行
1989年 4 月15日第13刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。　(庫一)

ISBN4-06-136179-1

講談社文庫

ある朝　海に

西村京太郎

講談社

目次

第一章　白人の町　七
第二章　ドクター・シトレ　二九
第三章　乗船　五八
第四章　決行　七八
第五章　接触せよ　一一三
第六章　反応　一二三
第七章　U・S NAVY　一五一
第八章　プレスマン　一九〇
第九章　わずかな進展　二一一
第十章　苦悩　二三五
第十一章　殺人事件　二五三
第十二章　査問会　二七〇
第十三章　疑惑の中で　二九〇
第十四章　真犯人　三〇二
第十五章　逆転　三一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第十六章　別れの挨拶　三四七
解　説　佐橋文寿　三六八

ある朝　海に

第一章　白人の町

1

南アフリカ共和国最大の都会、ヨハネスブルグに着いた途端に、田沢は、領事館で、この国での特別な心得を、こんこんと教えられた。どうやら、一ヵ月前に、ケープタウンで、日本の漁船員二人が、白人の女とセックスを持ったことで警察に逮捕されたために、神経過敏になっているらしかった。この国では、白人と有色人種との交際は、法律で禁止されているのである。

「この国の特殊事情を、よくわきまえて行動していただきたいのですよ」

と、度の強い眼鏡をかけた領事館員は、田沢が持っているカメラに視線をやりながらいった。

「わかっていますよ」

と、田沢は、笑って見せ、

「空港におりた途端に、白人専用（ホワイト・オンリー）と非白人（ノンホワイト）の看板にぶつかりましたからね。僕は、そうした人種差別の実態をカメラに納めたくて、ナイロビから飛んで来たんです」

「あまりここの政府や警察を刺激するような真似は慎んでいただきたいのですがねえ」

領事館員は、困惑した表情で言い、以前にも、ある新聞社のカメラマンがやって来て、人種差別の実態ばかりを撮り続けたので、領事館に抗議があったと、肩をすくめた。

「ここの法律に触れるようなことをして警察に逮捕されても、領事館としては、何もできないと

いうことを心得ておいてください」
「心得ていますよ」
田沢は、ニヤッと笑った。彼はフリーのカメラマンで一匹狼を自認している。誰の力も借りないことが、彼の誇りでもあった。アフリカに来たのも、自費で来たのだし、柔道と空手で鍛えた七十キロの身体だけが頼りだった。
館員のほうは、田沢の笑い方が、また不安になったらしかった。
「白人に対して、人種差別問題で議論を吹っかけるのも慎んでください。不快な思いをさせるだけですからね」
と、注意をつけ加えた。
「ほかには？」
「レストランなんかで食事をしようとすると、白人でないという理由で断わられることがあるかもしれません。そんなときには、日本人だといえば、大丈夫です。日本人だけは、名誉白人ということで、白人と同等に扱われますから」
館員は、いくらか得意気な言い方をしたが、田沢には、名誉白人という言葉が、喜ぶべきことなのかどうか、わからなかった。名前とは逆に、不名誉なことかもしれない。それは、街に出てみればわかるだろう。
田沢は、ズームをつけたカメラ一台をぶら下げて、街に出た。
ヨハネスブルグは、「黄金の街」と呼ばれているが、その理由は、街のショーウインドーをのぞくだけですぐわかる。まるで黄金の洪水だ。貴金属店のウインドーにダイヤモンドと金が氾濫

しているのは当然だが、洋品店のウインドーにまで金箔とダイヤモンドで飾り立てたドレスが並べてあった。もちろん宣伝用のドレスだろうが、田沢の眼には、この国の豊かさの誇示に受け取れた。

豊かさは、林立する高層建築にもあらわれている。歩いていると、ふと、ニューヨークかパリにいるような錯覚に襲われる。美しいビルに、豊富な品物、そして、走り回る高級車の列。田沢が、ここに来るまでに見て来たアフリカのイメージは、ここにはない。ケニアもコンゴも、みな一様に貧しかった。新興の意気は感じられても、国民の大部分は泥の家に住み、裸足の生活を送っている。

だが、しばらく歩いているうちに、この国の豊かさが、白人の豊かさであって、黒人の豊かさでないことが、着いたばかりの田沢にさえ、否応なしにわかってきた。堂々と胸を張って歩いているのは白人であり、黒人は、背をすぼめ、一様に暗い眼つきをしている。レストランで悠々と食事をとっているのは白人であり、閉め出された黒人は、道端に立ってハンバーグを食べている。公園の広い芝生で楽しげに遊んでいるのは白人の子供たちであり、黒人の子供たちは、鉄柵の外で、ぼんやりとそれを眺めている。

田沢は、そうした光景にカメラを向けているうちに、しだいに腹が立ってきた。白人に対する怒りももちろんだが、黒人の無気力さに対する怒りも感じた。統計によれば、この国の人口は、千九百万。そのうち、白人は三百六十万にしか過ぎない。黒人のほうが圧倒的に多いのだ。それなのに、黒人たちは、何ゆえ立ち上がって戦わないのか。

（まるで無気力だな）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

と、田沢が舌打ちをしたとき、彼の横を、何かがすごい勢いで走り抜けていった。

2

黒人の少年だった。

二人の白人の警官に追われていた。なぜ追われているのか、もちろん、田沢にはわからなかったが、彼の眼に異様に映ったのは、白人警官の態度だった。二人とも、明らかに黒人の少年を追い詰めることを楽しんでいた。長身の警官のほうは、ニヤニヤ笑ってさえいた。

少年は、追いつめられ、レストランに飛び込もうとしたが、そこに、白人専用（ホワイト・オンリー）の看板を見つけると、条件反射を起こしたように立ちすくんでしまった。

「おとなしくしろ」

と、警官の一人が怒鳴（どな）った。

少年は、どうしたらいいかわからないというように、舗道の上にしゃがみ込んでしまった。警官が近づくと、「殴（なぐ）らないでくれ」と哀願した。

だが、警官は、少年を立たせると、思いっ切り、腹のあたりを殴りつけた。鈍い音が、田沢の耳にまで聞こえた。少年が倒れると、また引きずり起こして、殴った。黒人の少年は泣き出した。

レストランで食事をしていた白人たちは、黙って眺めている。笑っている中年の女もいた。白人の青いすき通った眼が、この時ほど冷酷に見えたことはなかった。

レストランには、黒人の給仕人もいた。が、彼らは、眼を伏せたり、横を向いたりして、見な

いようにしている。
白人の警官は、今度は、少年の顔を殴りつけた。唇が切れたらしく、血が流れだした。
「やめろッ」
と、田沢は、見かねて叫んだ。
片方の警官が、じろりと田沢を睨んだ。自分に文句をつけたのが、この国では二等市民の黄色人種だということに、腹を立てた眼つきだった。
「殴るのはやめろ」
と、田沢はいった。彼も興奮していた。領事館で注意されたことは忘れてしまっていた。
「お前も殴られたいのか」
二メートル近い大男の白人警官は、いきなり田沢の襟首をつかんだ。威しでなく、本当に殴る構えだった。有色人種は殴り慣れているのかもしれない。
田沢は、身の危険を感じて、とっさに相手の足を払った。それがものの見事に決まって、警官の大きな身体がもんどりうって舗道に叩きつけられた。
（失敗った）
と、思ったのは、相手が倒れてからだった。もう一人の警官が、何か怒鳴りながら飛び掛かってくるのを、右足を飛ばして横転させてから、田沢は一目散に駆け出した。
背後で、叫び声と、パトカーのサイレンの音がした。捕まれば、たとえ名誉白人でも、警察は容赦しないだろう。
初めての街で、どう逃げたらいいのかわからなかった。血走った眼で周囲を見回したとき、一

台の車が、急ブレーキをかけて、彼の横にとまった。
助手席のドアがあいて、運転していた若い白人が、「乗れ」と眼で合図した。一瞬、田沢はためらったが、パトカーのサイレンにせきたてられて、身体を滑り込ませた。途端に、車は猛烈な勢いで走り出した。あっというまに、街の景色が後ろに流れ去っていく。曲がり角に来ても、男はほとんどスピードを落とさなかった。タイヤが悲鳴をあげた。スピードメーターを見ると、百キロ近いスピードを出している。田沢は、足を踏んばるようにしながら、バックミラーに眼をやった。パトカーは見えなかった。どうやら振り切ってしまったらしい。
街を出たところで、男は、やっとスピードを落とした。
「まずいことをやったものだね」
男は、ちらりと田沢を見て、きれいな英語でいった。まずいことをと言ったが、その顔は笑っていた。その時になって、田沢は、男が鮮やかな金髪であることに気がついた。灰色の眼が、思慮深い人間に見せていた。が、田沢には、まだ、この男が味方なのか敵なのかわからなかった。
男は、車をとめてから、煙草を取り出して、田沢にすすめた。
「君は、これからずっと、特別警察に尾行されるだろうね」
「脅さないでくれ。僕は、たんなる旅行者だ」
「旅行者だろうが、君はもう、この国では危険人物だ。黒人を助けて警官に抵抗したから共産主義者と見られたかもしれない」
「僕はコムミュニストじゃない」
「その判断をするのは警察だよ。君をコムミュニストとして逮捕すれば、警察は、無条件で百八

十日間勾留できる」
「ムチャクチャだ」
「それが、ここの法律だよ」
と、男は笑ってから、弁護士のロイ・ハギンズと名乗った。年齢は、二十八歳の田沢と同じくらいだろう。ロイ・ハギンズという名前から考えて、この国では、白人の中でもエリートといわれるイギリス系のようだった。
「僕は、日本人の田沢利夫だ。職業はフリーのカメラマンだ」
「カメラマンね」
ロイ・ハギンズは、何か考えるように、灰色の眼を宙に泳がせた。その視線を、田沢のカメラに落としてから、
「カメラマンとしての経験は？」
「もう十年近い」
「じゃあ、腕には自信があるね？」
「自分ではあるつもりだが、なぜ、そんなことを聞くんだ？」
「ちょっと考えたことがあってね」
ハギンズは、あいまいに笑ってから、吸いかけの煙草を窓の外に投げ捨てた。
「そろそろ騒ぎが静まったころだから、戻ろうか」
ハギンズは、車をUターンさせた。田沢は、なんとなく、話を途中ではぐらかされたような気がして、

「白人の君が、なぜ、僕を助けてくれたんだ？　この国では、有色人種の味方をするのは、罪悪なんじゃないのか？」
と、きいた。
ハギンズは、街に向かって、ゆっくり車を走らせながら、
「白人の中にだって、人種差別政策は間違いだと思っている者はいるということだよ。ただ、ごく少数だがね」
ハギンズは、街にはいってすぐの家のまえで車をとめた。きれいに刈り込んだ芝生の前庭があるしゃれた家だが、このヨハネスブルグでは、質素な構えだった。
「ここが僕の家だ」
ハギンズは、運転席に腰をおろしたまま、田沢にいった。それから、数メートル離れたベンチに腰をおろしている中年の白人の男を指さして、
「ああやって、毎日、特別警察の私服が、僕の家を見張っている」
と、苦笑した。
「なぜ？」
「僕を黒人解放運動の支持者だと思い込んでいるんだ」
「本当はどうなんだね？」
「さあ」
と、ハギンズは、あいまいに笑ってから、
「ところで、これから君はどうする？　この国から逃げ出すかね？」

「冗談じゃない。僕は、この国の現実をカメラに納めに来たんだ。仕事がすむまでは、逃げ出したりはしない」

「元気がいいな」

と、ハギンズは微笑した。温味の感じられる笑顔だった。ハギンズは、もう一度、ベンチの男に眼をやってから、

「困ったことにぶつかったら、僕の家へ来たまえ」

と、いってくれた。

田沢が、ハギンズの車からおりて、街の中心に向かって歩き出すと、ベンチの男が、のっそりと立ち上がって近づいて来た。私服の刑事だと、ハギンズから聞かされた直後だけに、自然に、田沢は身体をかたくした。

男は、田沢の前に立ちふさがると、サングラスの奥からジロリと睨んで、

「名前は？」

と、いきなりきいた。最初から尋問の調子だった。田沢は、黙って、パスポートを男の鼻先に突きつけた。日本人は名誉白人だという領事館員の言葉を思い出し、少しは相手の態度が変わるかと思ったが、「ふん。日本人か」と、男は、鼻先で笑っただけであった。名誉白人（Honorary White）という奇妙な称号は、この国の政府が、日本との貿易政策上、便宜的につけたもので、一般の白人は、他の黒人や黄色人種と同一にしか見ていないことを、田沢は感じた。

「あの弁護士とは、どんな関係だ？」

男は、相変わらず尋問口調できく。通りかかった白人のカップルが、立ち止まって、田沢を見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton